

課題名	10 水稲病害虫の発生生態と防除	分類	①
	イネばか苗病の種子消毒剤の選定 (スポルタック乳剤)		
試験研究年次	1～2年 (完了)		
<p>I 目的</p> <p>近年、福岡県では育苗期におけるイネばか苗病が多発傾向にあるので、有効な薬剤を選定し本病の防除法を確立する。</p>			
<p>II 試験方法</p> <p>1 試験場所 筑紫野市吉木 福岡農総試験内</p> <p>2 耕種概要</p> <p>(1) 品種: 「日本晴」 (自然感染粉)</p> <p>(2) 播種量: 縦15.5cm×横18.5cm×高さ3.5cmのプラスチック製容器当たり乾燥粉で約24.2g (標準育苗箱当たりの換算値は約150g) 播種。</p> <p>(3) 育苗床土: くみあい黒粒培土</p> <p>(4) 出芽・育苗: 30℃の恒温器内で3日間、出芽後は屋外で慣行育苗。</p> <p>3 供試薬剤 (有効成分: %)</p> <p>スポルタック乳剤 (プロクロラズ: 25%)</p> <p>4 処理方法</p> <p>水選後風乾した種子を供試し、室温下 (17～20℃) で以下の処理を行った。</p> <p>(1) 種子粉衣処理: 乾燥種子重の0.5%の薬量で湿粉衣したあと風乾し、24時間浸種。換水は1日1回。</p> <p>(2) 浸漬処理: スポルタック乳剤1000倍液、ベンレートT水和剤200倍液にそれぞれ24時間浸漬処理。ベンレートT水和剤処理後の風乾は8時間、その後の浸漬は2～3日間、換水は1日1回。</p> <p>5 区制 3区制</p> <p>6 調査方法</p> <p>(1) 発病状況: 播種後17～20日後に各区の全苗について発病の有無を調査。</p> <p>(2) 苗長: 発病苗調査時に、各育苗箱の見かけ上健全苗20本について苗長を測定。</p> <p>(3) 出芽程度: 緑化開始時に育苗箱毎に出芽状況を程度別 (4: 無処理区の出芽程度～0: 全く出芽していない、の5段階) に調査。</p>			
<p>III 主要成果の概要</p> <p>1 スポルタック乳剤の1000倍24時間浸漬処理は、処理後に風乾しないにもかかわらず、対照のベンレートT水和剤200倍24時間浸漬処理及び0.5%湿粉衣処理に比べて優れた防除効果を示した。</p> <p>2 本剤はやや出芽抑制が認められたが、実用上は問題ない。</p>			

IV 主要成果の具体的データ

第1表 ばか苗病に対する種子消毒効果 (1年)

供試薬剤	処理濃度 ・量・方法	風乾	発病苗率 (%)	防除価	出芽 程度	苗長 (cm)
スポルタック乳剤	1000倍24時間浸漬	—	0	100	3.4	9.7
ヘルトT水和剤	200倍24時間浸漬	○	0.9	95.8	4.0	11.6
	0.5%湿粉衣	○	0.5	97.6	4.0	11.0
無処理	—	—	20.9	—	4.0	11.8

注) 播種: 5月28日、調査: 6月14日

第2表 ばか苗病に対する種子消毒効果 (2年)

供試薬剤	処理濃度 ・量・方法	風乾	発病苗率 (%)	防除価	出芽 程度	苗長 (cm)
スポルタック乳剤	1000倍24時間浸漬	—	0.1	98.8	4.0	15.7
ヘルトT水和剤	200倍24時間浸漬	○	1.2	85.7	4.0	15.6
無処理	—	—	8.4	—	4.0	16.7

注) 播種: 6月8日、調査: 6月28日

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 1991年度主要農作物病害虫防除基準に採用予定である。
- 2 本剤は、いもち病やごま葉枯病にも登録はあるが、心枯線虫病には効果がない。

VI 今後の研究上の問題点

- 1 スポルタック乳剤のようなEBI剤の効果は静菌作用によるものであることから、育苗期における効果が本田期を通じて持続するかどうかの確認が必要。

VII 資料名

- 1 平成元年度 福岡県農業総合試験場生産環境研究所 普通作物病害虫関係試験成績書
- 2 " 2年度 " " " (掲載予定)